

○黒澤美智子（共立女子短大）

〔目的〕近年、若者や子供たちに不正咬合や顎関節異常の者が多く、原因は食生活の変容であると言われている。そこで、大学生を対象に食物摂取行動に関するアンケート調査および咬合力の測定実験を行い、食行動と咬合力との関連を検討した。

〔方法〕対象は昭和47年度生まれから52年度生まれの大学生である。それぞれ19歳から21歳の時点で調査、実験をした。アンケート調査では顎の状態、咬み合わせや歯並びの状態、および食べ方などに問題はないかを調べた。その中で、顎関節に異常はなく、歯並びがよく、親元から通学している学生5人を対象に、7～10日にわたって咬合力の日内変動を調べた。起床時、朝昼晩の食事前後、歯磨後、入浴前後、就寝時など生活行動に合わせて一日10～13回、咬合力を測定した。咬合力の測定には、フジフィルム咬合力測定システム（発色剤を内包したマイクロカプセルと顕色剤が塗布されたフィルムシートで、圧力が掛かれば、強さに応じて赤色発色し、それを画像解析する。）を使用した。

〔結果〕20歳前後の女子学生たちの咬合力は平均700N前後であった。しかし、個人差は著しく大きく200～1,500N位までの違いがあった。特に強く2,500N前後の者もあった。男子学生の場合はいずれもさらに約200N上回っていた。日内変動においては、どの被検者も各生活行動による影響がみられた。食後、入浴後、歯磨き後に咬合力は高くなった。しかし咬合力は軽食後と、硬い間食後は低下することもわかった。